

『ラテンアメリカ主義のレトリック』、あるいは、『レトリックは歴史から遊離しないというレトリックについて』

『ラテンアメリカ主義のレトリック』

エディマン 二〇〇七年九月

柳原孝敦著

現在、公務でアメリカ合衆国の大学を調査するためにサン・フランシスコに滞在している。明後日にはロス・アンジェルズに移動し、その後ふたたび、ニュー・ヨークへと移動する。かんとんにいうと、この旅に出発するまでは多忙で、落ち着いて柳原孝敦氏の御著書『ラテンアメリカ主義のレトリック』に集中することができず、成田からサン・フランシスコに向かう機中と、つかのまの休日となる到着直後の日曜日の午後に、萎える思考力を奮い起こし、三百ページ近くにおよぶ大作にあらためて取り組みざるを得なかったのだ。空港からの移動に際して、こうした成り行きにも奇妙な偶然の一致と思われかねない要素が多分にあることに気づいた。

いうまでもなく、サン・フランシスコやロス・アンジェルズは旧スペイン領であり、サン・フランシスコの近辺の町の内外をつなぐ交通機関バートで市内を移動する最中にも、スペイン風の建築が立ち並ぶ景色を目にすることができる。線路に平行して走るハイウェイの側壁も、他の地域には珍しいスペイン風の装飾が施されており、ここがアメリカ合衆国の一部ではない

としても不思議ではないかのような気持ちになる。サン・フランシスコからそれほど遠くない、スペイン語で「高い樹」を意味する Palo Alto にあるスタンフォード大学の建物は、異国的だと言つていいほどのラテン風の佇まいを持つ。また、いったん北カリフォルニアを離れて、ロス・アンジェルズやサン・ディエゴなどの南カリフォルニア地域に足を踏み入れれば、ある意味で合衆国を代表するとも言えるカリフォルニアが、じつは合衆国そのものというよりは、メキシコなどの中南米との人種的、文化的交差点であることが実感できるはずである。サン・ディエゴまで南にくれば、国境を隔てた向こう側がすぐテイファナであることが実感できる。そこには、ハイ・クラスを気取つたショッピング・モールやジャズ・バー、あるいはヒップなスペイン趣味ではなく、たくみに日本語をあやつり、外貨を獲得しようとする人々や、国境を越えてより豊かな合衆国と融合することを夢見る人々が、国境のこちら側よりも濃厚な熱気を放ちながら暮らしている。そうした意味でメキシコの人々は、おそらく柳原氏が同書で十九世紀末のラテンアメリカ文学について述べておられるように、政府との対立関係において敗北しつつも、政府とは無関係に文化を構築し続けているのだと言つていいのかもしれない。

そうした地域を旅するにあたって、柳原氏のご著書の第一部後半、「ナシヨナリズムとラテンアメリカ主義」、「文学としての勝利／政治としての敗北」などのセクションを読み進む際に感じるような、ナシヨナリズムと文化との心地よいずれとある種の祝祭性を感じることがなくもない。それを「現実」とそれにたいする「幻想」の二重性として定義しつつ、「マジックリ

アリズム」的と呼ぶことが妥当かどうかを議論することは差し控えるにしても、そのようなずれこそがまさに、ラテンアメリカ文学の魅力とされてきた祝祭性を生み出す装置となっていたのではないかと実感される。それは、柳原氏が描かれるラテンアメリカを特徴づけるはずのずれ、あるいは柳原氏の論述の枠組みの特異性を考慮するのであれば、デリダの基本概念としての“*différance*”に結びつけてもよいような、ポジテイヴでもネガテイヴでもありうる奇妙なずれでもあるのだが、カリフォルニアの風景と柳原氏の文学史的な野心に満ちた記述がオーヴァラップする幻想に見舞われるとき、ラテン語を起源とする英語 *vertigo* と呼んでも差し支えないような目眩と混乱に襲われるのはなぜなのか、その理由を探求することが本稿の目的になるのだろうか。

* * *

「ラテンアメリカ主義」も「レトリック」も、じつは耳慣れない言葉である。評者の知るかぎりでは、ラテンアメリカ文学は長らく日本の読者には親しみ深いトピックであった。最初のブームは、おそらく六〇年代から七〇年代にかけて起きた。学生の頃、まだ東京の各所に残存していた古本屋の店頭には、その頃のブームの名残としてバルガス・リョサ、ホルヘ・ルイス・ボルヘスその他の翻訳が置かれていたし、大学の文学志望の「青年」たちの間では、ボルヘスはまだ新しい未知の作家として読まれていた。いいかたは悪いが、ジェイムズ・ジョイス、ウイリアム・フォークナーなどがいわば正統派の作家であったのに

たいして、ボルヘスはしばしばサミュエル・ベケットなどと一緒ににされ、倫理性や伝統的な美学を構築しようとした作家たちからは一線を画する、深遠な言語論的形而上学にもとづいた作品を書いた異端の作家とされていたように記憶している。おそらく第二次ブームは八〇年代に起きた。『チベットのモーツァルト』、「逃走」といった時代的な学芸、文芸の意匠に一致したのか、あるいは、フーコーやデリダなどのいわゆる「ポスト構造主義」の初期の受容が文学の理解に影響したのか、アメリカの黒人文学ブームなどと重なってもいたはずの第三世界の文学としての意味合いをラテンアメリカ文学に付与していたかも知れない第一次ブームとは違い、焼酎の商標としてつかわれもした『百年の孤独』のガルシア・マルケスをはじめとするラテンアメリカ作家たちの作品は、読まれ、消費され、模倣され、これによると忘れ去られたのかも知れない。この頃のラテンアメリカ文学流行のキーワードは、おそらくフレドリック・ジェイムソンなどの合衆国の批評家たちによって多用されたマジックリアリズムであり、ラテンアメリカの文学作品を模倣しようとした、『マシマス・ギリの失脚』の池澤夏樹のような書き手もあらわれたのだった。

柳原氏による「ラテンアメリカ主義」の定義は明快である。アメリカ合衆国の国力と経済力、および帝国主義的な拡張主義を脅威と感じたラテンアメリカ諸国の文化人たちが構成した近代、反アメリカを趣旨とする言説、あるいはレトリックを、柳原氏は集合的に「ラテンアメリカ主義」と呼ばれている。そして、驚くべきことに柳原氏は、同時にその「ラテンアメリカ主義」がまったく凡庸な紋切り型のパターンであるとあっさり

認知される。さらに、柳原氏は、書き手が文学者であつてもそうでなくても、いわゆる文学作品の範疇に属さないテクストを冒頭から取り扱われるのである。

ボルヘスやドノソ、カルペンティエール、ガルシア・マルケスなど、ヨーロッパや英米文学に影響され、文芸的な作品構成法をもちいた作家たちと彼らの文学的な著作に親しんだ評者のような古典的読者にとつて、著者のこうした姿勢は、ある種驚くべきものと思われた。柳原氏の著作がとりあつかつている時代は、巻末に付された年表からもわかるように、一八一〇年以降のラテンアメリカ文化史である。あえて「文化史」と呼ぶ理由については後述することにするが、そうであれば、柳原氏が扱われているラテンアメリカ主義の時代は、欧米のロマンティシズムやアメリカにおけるロマンティシズム、つまり近代文学の幕開けの時期とほぼ重なつていふことだ。そうでありながらも柳原氏は、冒頭でとりあげられる、ニュー・ヨークの建築についてのカルペンティエールによるエッセイや、三百ページの長さの本書の各所で引用される、文人たちのおもに政治・文化運動にかかわる文書を取りあげ、いわゆる文学作品をトピックとして取り入れることを拒むばかりか、後半部ではツヴェタン・トドロフに言及するなどしながらも、作品の構造分析を行うことを拒否するからである。これは、従来のラテンアメリカ文学研究にはなかつた、まったく新しい姿勢ではないのか？

冒頭の、ニュー・ヨークの建築についてのラテンアメリカ文人たちの言葉から本書の論述が開始されること自体が、そもそも徴候的であるといつてよいのかも知れない。西欧においては

中世以来、建築は典型的に時代的な意匠や、柳原氏が好むらしいミシェル・フーコーの言葉を借りれば、「エピステーメ」を顕著に示すものではなかつたか。本書では「キリスト教」として一カ所だけで言及されている宗教と結びついて、ゴシック建築やロマネスク様式、あるいはトマス・ジェファソンがヴァージニア大学の建築に際してもちいたギリシャ風建築、あるいは柳原氏がコメントされているル・コルビュジエなどは、各時代の文化と権力との結びつきを、構築物として顕著に示すものであつたはずだし、十八世紀、十九世紀、二〇世紀前半においては、そうした構築物としての家を代表的な例として、内部と外部を隔て、三次元的な構築性を持つものとしての建築やその構造は、ロマンティックかつ有機的な全体性と弁証法的な歴史性を持った文学作品の比喩あるいはレトリックの一部としてもちいられただけでなく、リンカーンの“house divided”スピーチにおけるように、国家の比喩、あるいはそれにかんする文字通りのレトリックとしてもちいられた。たとえばガルシア・マルケスは、『族長の秋』、『百年の孤独』、『予告された殺人の記録』などで同様のレトリックや比喩を構造的に解体しつつ、同時に利用してもいたのではなかつただろうか？

構造化と脱構造化を同時に進行させつつ、構造と非構造的なものとの序列を逆転させる形式をおそらく「脱構築」とよぶのだが、建築物としての家その他の増殖を、ゴシック風に、自意識的に扱う『百年の孤独』などにおいても、「脱構築」(de-construction)は当然のごとく具体的な建築物によつて比喩的に表象される「家」のイメージにそくして行われている。ガルシア・マルケスに影響を与えたとされるウィリアム・フォー

クナーにしても、初期作品から家とそれが持つ閉鎖空間を家のイメージによつて表象していたし、人種問題もまた、西欧的な家とのかかわりにおいて取り上げられていたのだ。ラテンアメリカに似て合衆国そのものと一致することがないアメリカ南部を描く代表的作品である『八月の光』や『アブサロム、アブサロム!』が、原稿段階ではともに“the dark house”と題されていたことなどは顕著に知られている。フオークナーが繰り返し描くヨクナパトーフア郡の郡役所もまた、ひとつの建築物であり、国家や共同体の比喩となっていたはずだ。

柳原氏は、ニュー・ヨークの建築にたいするラテンアメリカの文人たちの批判から本書を書き起こすことで、建築に代表されるヨーロッパ・アメリカ的構築性そのものを批判しているに違いない。この批判精神は、「私たち」という、論述の主体とされる集合体に共有される視点として、おそらく本書全体を貫き、文学作品を論じることを柳原氏に許さないのだ。おそらくこの傾向には、近代とロマンティズムやその美学を回避しようとする姿勢が現れているに違いないし、かつ西欧的な建築と同一視されかねない、ハイカルチャーとしての文学の制度からの逃走の意志が読み取れるのだろう。

しかし、ここにひとつの二項対立的「構造」を観察することができると言つても過言ではないだろう。本書冒頭部分で、ニュー・ヨークの建築についてパリの建築がとりあげられるとするならば、ヨーロッパとアメリカ合衆国はある種の連続性を持つたものとして理解されているだろうから、ここには、ヨーロッパアメリカ合衆国Ⅱ構築性Ⅱ近代Ⅱ文学／ラテンアメリカⅡ非構築性Ⅱ近代の否定Ⅱ文化という、二項対立的に相反す

るイメージの連鎖が見いだされるかも知れない。「ラテンアメリカ主義」が十九世紀以来のアメリカ合衆国の帝国主義的拡張主義とヘゲモニー、そして柳原氏によつてアメリカ合衆国の民主主義と結びつけられている、国家と文化との一致を前提とするナシヨナリズムに対抗する「言説」として、十九世紀初頭以来、現在「ラテンアメリカ」と呼ばれる地域の文化圏内で反復されてきたというのが本書における柳原氏のもつとも基本的な主張であるとするならば、上記の二項対立的な比喩、隠喩、あるいはおそらく正確には換喩と呼ばれるべき語の連鎖は、「反ナシヨナリズム」という言葉遣いについてさらに検討を要するに違いないにしても、さらにそれぞれがナシヨナリズムと、おそらくは反ナシヨナリズムととりあえずよんでもよいような態度と連接するに違いない。これが本書における柳原氏の議論の骨子となる「構造」であると言つていいだろう。ヨーロッパアメリカ合衆国Ⅱ構築性Ⅱ近代Ⅱ文学Ⅱナシヨナリズム対ラテンアメリカⅡ非構築性Ⅱ反近代Ⅱ反ナシヨナリズムという、二項対立的な構図である。

ガヤートリ・チャクラヴァオーティ・スピヴァックやポール・ド・マンの視点が批評的コメントにおいて取り上げられてもいるし、後半ではジャック・デリダにかかわって、「声」の概念に触れるコメントも用意されているのだから、本書が脱構築的な体裁を用意していることに疑問の余地はない。そうであれば、ないものねだりは覚悟のうえで、こうした二項対立的な換喩の連鎖が絶対化されないことを祈るばかりであるが、実際にはどうなのだろうか。

本書は上記のような立場から、連綿とラテンアメリカ主義の

系譜を系譜学的に分析する好著である。あえて文学作品をあつかわない潔さも、イギリスやアメリカに強い親近感を抱き、セルバンテスやラブレール、ホーソンやカフカ、ヘミングウェイやフォークナーに習ったボルヘスやガルシア・マルケスに触れることをしない大胆さも、これがラテンアメリカ研究なのかと叫びたくなるほどに新しい。柳原氏の方法論を「新歴史主義」的であると陳腐に定義してみるよりも、百科全書的な知の展覧に目をみはることのほうが本書にたいする正確なりアクションのとりかたであるにちがいない。「文学」、「文芸」や「美学」の全盛期を恋いるセンチメンタルなノスタルジアなど吹き飛ばすほどに、本書は資料的な魅力に満ち満ちており、文学を中心としてラテンアメリカ文化をわずかながらに覗き見た評者のような生半可な文学屋に、従来とは異なつたラテンアメリカを見せてくれるという意味では、まったく申し分ない野心作であると言つていいだろう。また、批評的方法論の教科書であるといつてもいいほどに、各章の必要に応じて現代批評の視点や比較的新しい批評テキストからの引用が展開されていることも注目すべき特徴である。上記のフーコー、トドロフ、スピヴァック、ド・マン、デリダだけでなく、松浦寿輝、東浩紀、古矢旬、ベネディクト・アンダーソンなどが、「私たち」を代表する本書語り手の対話者たちになる。これほどに豊かな対話をなした著者に、評者は羨望を覚えるといつても過言ではない。本書は、優れたラテンアメリカ文化研究者による、七〇年代から現在までのポスト構造主義的批評の成果の集大成でもあるのだ。

しかし、もし上記の「構造」が本書に一貫していると言えるのだとするならば、構造を特権的なものとして批判するはずの

ポスト構造主義的な前提が覆されるのかも知れないとも感じる。これは、評者によつて意見の分かれるところかも知れない。現在の評者が理解するところでは、構造は文化体系などの閉じた領域の特質として特定され、議論される可能性を持つが、そうした「構造」は実際にどこかにあらかじめ存在しているわけではない。文化や言説を分析する際に、もし文化なりテキストなりの構造を特権化して語るとするならば、それは本来には不在であるものを本来的に存在するものとして特権化するという意味で、西欧中心主義的な存在論や構築性に加担するであろうと考えられるがゆえに、ポスト構造主義的な立場をとる批評においては否定されなければならないはずだ。柳原氏が古矢旬氏による現実的、歴史的なアメリカ政治論を参照しつつ構造として抽出する、独立した個人や州の集合体としての「アメリカ合衆国」のありかたもまた、歴史的に合衆国が持ち得た現実の力とは別個に、柳原氏が古矢氏を引用しながら合衆国が成立しなかつたかもしれない可能性に言及されることからわかるように、他の可能だつたかもしれない政治的構造のありかたを抑圧したうえでしか特定し得ないものであり、構造化と同時に生起する階層構造を必然的に前提とする。おそらく、柳原氏がこのことに気づかれていることは、本書の理解の過程にとつて非常に重要である。どのような批評的言説によつて特定されるものであるにしても、特権化された単一の構造がテキストに現前することはなく、脱構築の過程を経たとすれば、そうした構造はあらかじめ存在せず、つねにすでに不在であったことが証明されるはずである。

たとえば、デリダの“*différance*”などの基本的概念は、共時

性、通時性両方において絶対的な存在や構造のもとにおいて意味生成がなされることがない、テクスチュアルなエクリチュールの位相を前提としている。柳原氏が文献リストに挙げておられる、東浩紀による教科書的なジャック・デリダの解説書のタイトルにしたがって述べるならば、「存在論的」であることと「郵便的」であることは、柳原氏やラテンアメリカの文人たちがナシヨナリズムの基準点としているかに思われるアメリカ合衆国の文化とラテンアメリカ主義の言説との関係に似て、それぞれがそれぞれの対立項であるかのように見えながらも、まさに対立項であるという理由でじつは同時的で双子的であり、しかも異なっている。それがおそらく東が「存在論」ではなく「存在論的」という言葉を、「郵便」ではない「郵便的」という言葉と、接続詞をつけずにあいまいに併置した理由だろう。評者の理解が間違っていないけれども、柳原氏があつかわれている、ナシヨナリズムを体現するはずのアメリカ合衆国やそれに先立つヨーロッパと、反ナシヨナリズムというよりもむしろ、国家・政治と文化の同一性を前提とするナシヨナリズムを解体するべく、「政治において敗北しつつも文学として勝利」するラテンアメリカ主義との関係は、まさに東が「存在論的」、「郵便的」と呼ぶものと同じの、同時的な双子的関係性を持っているのではないだろうか。

評者にとつて、本書においてもつとも説得力があった議論は、ラテンアメリカ主義なるものが、国家の境界と同一視されないかたちで、ラテンアメリカ諸国において反復されたのだとする柳原氏の主張であった。実際、柳原氏が指摘されるように、多くがすでに独立国家であったラテンアメリカ諸国において、か

ならずしも国家の単位、境界にかかわりなく、反米的ともいえるラテンアメリカ主義の言説が編み出され、反復されたことは重要である。柳原氏が「ラテンアメリカ主義」を取り上げられた理由は、おそらくひとつには「ラテンアメリカ主義のレトリック」が、国家の統制を有機的に構築すると想定される境界線にたいして越境的であり、脱構築的であるからだ。アメリカ合衆国と同形の政治的形態を実現するべきであるという主張のもとで、各国において合衆国的なナシヨナリズムの言説が反復されたり、あるいは逆に、各国におけるナシヨナリズムがそれぞれに固有の反米的言説として創りだされる可能性もあったのではないだろうか。浅学な評者の憶測として、柳原氏が触れられなかったところで、「ラテンアメリカ主義のレトリック」とは異なる言説もまた編み出されていたのではないかと想像するが、漠然と「ラテンアメリカ」と呼ばれている地域あるいは文化において反復され、強化されたとされる「ラテンアメリカ主義のレトリック」は、本書において国家の境界線と一致することがない「私たち」の連帯を形作っているものとして特権化されているようにも思われる。もし、それが言説として流通し、歴史的時間をとおして反復されたのだとするならば、ナシヨナリズムや民主主義的な個人主義をも超越しうる文化の形態として、現代の批評的土壌においては高く評価されるに違いないからだ。本書の前提事項とはそぐわないかも知れないことを承知のうえで、本稿冒頭で「祝祭性」(カルナヴァレスク)という言葉をつかったのは、ひとつには本書の論述形態そのものが示唆するかに思われる非構築性と越境的な言説の形態の好ましさとその特質を指摘したいと感じたからにほかならないが、同時にその

言葉が、ミハイル・バフチンが論じるフランソワ・ラブレールにおけるような、あらかじめ存在すると想定された階層構造の逆転を意味し得るからにほかならない。

つまり、評者の自家撞着的で無意味なこだわりでないことを祈りつつ述べるならば、ここにもまた、構造化によるメタの視点と超越的な主体を前提する構造が存在すると言えるかも知れないということだ。たとえば、柳原氏の言われる「文化」が、ナショナリズムと一致することのないがゆえにまさに「文化」であると定義されるのだとすれば、「アメリカ（＝ヨーロッパ）」「ナショナリズムと同一化した文化」対「ラテンアメリカ」「ナショナリズムと同一化しない文化」という組み合わせを、上記で特定しようと試みた本書における二項対立的な関係性のリストを改訂するかたちで付け加えることができるだろう。もし、最初のコンビネーションにおける「ナショナリズムと同一化した文化」が、アメリカ合衆国がラテンアメリカにしたように、精神的な意味も含む抑圧を行使するのだとすれば、政治において勝利している、国家に従属した文化としてのハイカルチャーであるアメリカ合衆国やヨーロッパの文化（というよりも、おそらく文学）と、政治において敗北している、国家に従属しない文化としてのローカルチャーであると定義されかねないラテンアメリカ文化とは、国家にも似た全体性と自律性を前提とした精神的な「意識」の領域と「無意識」の領域が、同時に生起する様と似た様相を呈してはこないだろうか……。評者は、脱構築的であるだけでなく、ポストコロニアルな視点を持つ本書の論述が、「私たち」という仮想の主語のもとに導かれることにいくぶん違和感を覚えなくてもなかつた。その理

由も、言説や言語によって超越され弱められるはずのロマンティックな個人主義にもとづいて構想された主体が、柳原氏が述べられるようにフォーコー的な言説によって乗り越えられた結果として、「意識＋無意識」の全体性があらためて集合的な超越的主体として本書の論述の全体性を前提する枠組みとして居座り、強化されたからなのではないかと疑われてくる。

話題を整理しよう。文化という言葉の現在の使用法は、八〇年代にアメリカ合衆国やイギリスを中心として制度化されたものである。それは、西欧列強による植民地主義とも重なる、十九世紀ヴィクトリア朝からモダニズムまでの時代に固有だとされた、ハイカルチャーとして植民地化に貢献した従来の西欧文化に対抗するものとして使用された。存在とエクリチュールのあいだに、西欧的な音声中心主義や現前の形而上学によって構築された階層構造が自然化されていたことを批判的に再検討した結果、シニフィアンとシニフィエの分離と等価性を前提としたいわゆる表象研究として文化を再検討した結果生まれた制度的変遷のスローガンだった。現在文化とよばれるものは、記号論的な境界を持たない非存在であり、あらかじめ構造化されてもいない。したがって、この文化は、「ハイ」でも「ロー」のどちらでもない。

ということとは、現在利用できる「文化」の概念は、少なくとも二つあるということだ。つまり、柳原氏も名前を挙げておられるマシュー・アーノルド（発音は、英語では「マシュー」であるはず）らが植民地化の規範として利用した、国家主義や政治と結びつき、政治において勝利した、ハイカルチャーとしての「文化」がひとつ。そして、それに対抗するべく構想された、

植民地と非植民地の絶対的な差異を正しく否定し、国家主義や政治から逃走し、政治において勝利も敗北もしないはずの「文化」がもうひとつである。後者が政治において勝利も敗北もしないのは、柳原氏が論じられる文人たちのテキストで政治と連結されている文化の逃れがたく政治的な解釈や構造化は、文化そのもののありかたと決して一致しないからである。もし、柳原氏の論述が、「政治において敗北し、文学において勝利する」「ラテンアメリカ主義のレトリック」を、それゆえに「ハイ」であるとしているとするならば、「高い」は「低い」であり、「低い」は「高い」というかたちで、階層構造そのものは破棄されないままに、歴史を肯定しつつ上下の転倒が起きるのみであるだろうし、文化研究や脱構築のありかたと齟齬をきたすのではないだろうか。

「レトリック」が耳慣れない言葉であると評者が述べたことに違和感を覚える読者もいらつしやるかも知れない。ロラン・バルトに『旧修辞学』なる著作があることなどから、レトリックという言葉が普遍的に共有される意味を持ち得ないだろうと想像されるので、この語にも特定の具体的な限定された使用方法があつてしかるべきかとも思う。柳原氏がフーコーの「言説」と同一視される「レトリック」という言葉遣いは、いくぶん独特な本書の論調をつくりあげているともいえるだろう。おそらく、「レトリック」や「修辞」は、ラテン語における雄弁術などに使用されたものであり、歴史の過程にあるとされる存在としての個々人の声やパロールの起源としての主体や身体性との密接な結びつきを想起させるのたいして、フーコーの「言説」は、柳原氏もそう認識されておられるとおり、個々人の歴史的

なパロールやライティングと直接結びつくことがない。ここでも評者は、上記の構造や文化、語りの想像上の主体として本書で措定された「私たち」について述べたのと同形の問題につきあたる。言説は、アメリカ合衆国に於ける個人と国家との関係の相似形のようなものとして、個々人のレトリックや発話の集合体として集団的に存在するわけではないのではないかという疑問がわきおこる。柳原氏の「レトリック」という言葉を本稿で評者が反復して使用している階層構造の解釈のスキーマに付け加えるとすれば、それはやはり階層構造の上位に置かれるべき項目なのだ。主体とされるものと言語とが、あらかじめ国家と文化がそうであり得るようなかたちで自然化されて接続されているゆえに、「レトリック」は「ハイ」な概念であり、「政治において敗北し、文学において勝利する」ラテンアメリカの文化の描写に使用される言葉として、かならずしも適切ではないかも知れない。「ラテンアメリカ主義」が言説と呼ばれるままに放置されていれば、階層構造を本来的に意識する必要がなくなるに違いないのだが……。 「レトリック」と「言説」とは、やはり「存在論」と「郵便」との関係に似て、それぞれが主体や国家による言語としての文化の統制と、主体や国家による言語としての文化がフーコーの言う権力と結びつくことによつて支配的となる以前の、テキスト的なありかたを示すものではないのだろうか。

ジャック・ラカンのテキストは評者にはあまりにも難解にすぎ、解説書などの助けを借りなければ解釈できないことも多いと認めつつ、そうした解釈のひとつをもとにして紹介するならば、ラカンによるフロイトの意識と無意識の再定義のひとつの

解釈はつぎのようなものだ。たとえば、Elizabeth Groz によるラカンのフェミニスト的解釈を趣旨とする解説書に依拠する (Elizabeth Groz, *Jacques Lacan: A Feminist Introduction* (London: Routledge, 1990))、**「意識」**とはシニフィアンとシニフィエの社会的な、自然化された結びつきがすでに形成された領域であり、**「無意識」**とはシニフィエと連接されないシニフィアンが戯れる場である。想像界から言語化された象徴界へと幼児が移行するに際して、父の法によつて機能する抑圧が創りだすのは、この二つの領域の区分である。ある種単純化された解釈で申し訳ないようだが、フロイトの解釈やそのさまざまなヴァージョンのなかで第一義的であるとされる傾向がある **「意識」**が、ラカンの特殊な形態であることを示す解釈なのでお許し頂きたい。また、シニフィアンとシニフィエの具体的な連接が実現され、シニフィエと結びつかないシニフィアンが **「意識」**とされる領域から排除される抑圧の過程は、**「意識」**を第一義的なものとして生成したのちに **「無意識」**を生成するのではなく、言うまでもなくその両方を同時に生成するのであり、**「意識」**と **「無意識」**は、一と二、前と後、存在と不在といったように序列化されるのではなく、**「ハイ」**でも **「ロー」**でもない。**「意識」**は、テキストに見いだされた意味、構造、解釈などに似ており、**「無意識」**はテキストそのものに似ている。これはいくぶんいい加減な憶測にすぎないが、フーコーの言う言説は、かならずしも権力と結びつくことがなく、むしろ文化的な無意識の領域に属するのではないのだろうか？

どうしても気になるので書いてしまうと、評者はみずからが

アメリカ合衆国の文学を専門としていながらも、柳原氏が導入される批評家や批評的テキストが、ヨーロッパとアメリカに関連したものにほぼ限定されていることが不思議なのだ。こうした論述の方法は、非常に具体的な批評的階層構造化であるかも知れず、ナシヨナリズムの起源がヨーロッパとアメリカ合衆国にあるのだとすれば、ヨーロッパとアメリカの批評をハイ・カルチャーとして特権化したり、メタ・ストラクチャーとして利用するものではないのかという疑問をどうしても拭い切れな。しかも、議論される対象となるテキストが「ラテンアメリカ」のものであるとすれば、「ハイ」な「意識」としての抑圧するヨーロッパ、アメリカ合衆国と「ロー」な無意識としてのラテンアメリカという、ポスト構造主義以前の主体の構造化の図式が、ひとつの全体性をなす組み合わせとして現れでてこないだろうか。この階層構造が、「政治において敗北し、文学において勝利する」ラテンアメリカについての論述の基底にあらかじめあるがゆえに、階層構造の破壊ではなく逆転が、西欧的な歴史や文化、社会の枠組みに固有な祝祭性をともなつて可能となるのでなければいいのだが。政治と文化の結びつきは、しばしば批評と批評されるテキストとの関係にも似ているだろうし、批評と批評されるテキストとは、西欧のヘゲモニーと文化の連接関係を警察的に監視するかのようと思われるアメリカ合衆国の文化と「他」なる文化にも類似しかねないのではないだろうか。

ただ、こうした指摘が何らかの意味を持ちうるとして、これは明らかにないものねだりというべきである。もし、柳原氏の論述が「意識」としての合衆国やナシヨナリズムを特殊な形態として相対化しうる「無意識」としてのラテンアメリカの諸言

説とその同時代的性質に焦点をあてるというように、すでに実現されている通時的なパースペクティブとならんで共時的なパースペクティブを実現していたとするならば、つねに否定的に語られざるを得ない無意識的に似た言説の束としての「ラテンアメリカ主義」を「ラテンアメリカ主義の言説」などのタイトルのもので無機的に語ることはできたかも知れないが、本書が持つような迫真の雄弁さは実現され得なかつただろう。本稿で『ラテンアメリカ主義のレトリック』を文化史とあえて呼んでみた理由もそこにある。柳原氏の御著書はおそらく歴史書であり、とりあえずのところ、ハイカルチャーとしての「ラテンアメリカ主義のレトリック」を、アメリカ合衆国の新歴史主義にならうかたちで実践的に示す好著であると言っておいてもよいのではないだろうか。

ただ最後に、デリダにおける「声」と「郵便」の関係が議論される後半の一節で、本書が必然的に抱え込まざるを得なかつた矛盾点が明確化されていることを指摘しておいたほうがよいだろう。デリダの著作において、つねに起源と切り離されているエクリチュールや署名は、反復されることよつてのみ力としての意味を生成しうる。しかし、「声」や「パロール」や「作品」は、起源としての発話者や作者の身体性と結びついた概念である。このことが確認されるべきだろう。ここでも「意識」と「無意識」の関係に似たことが起きる。「声」や「パロール」は存在としての身体性や声と結びつけられた現象学的な概念であり、むしろ「エクリチュール」の特殊な形態である。柳原氏が、「声」と「手紙」を同一視されるパッセージが見られるが、評者はその見解には反対である。「手紙」はエクリチュールであつ

て、書き手の意志をそのままに読者に伝達しうるものではない。身体性や「声」をエクリチュールの起源とし、それが伝達すると想定される内容がそのままに伝達されうるとする見方は、じつは構築性や構造化を前提とする文学の制度にこそなじみ深いはずである。このように述べるのも、そうした箇所に、柳原氏の書き手としての無理からぬ矛盾と好ましきを感じるからこそである。

ガルシア・マルケスに「大佐に手紙はこない」という短編があることはよく知られている。実際、柳原氏も冒頭からしばしば「愛の不在」や「郵便」に触れられているのだが、これもガルシア・マルケスの得意とするフレーズである。評者はよく、ガルシア・マルケスの「愛」がいったい何を指示する言葉なのかと考えることがあつた。この言葉は評者にはいまだに意味不明に思われるのだが、ひとつの解釈の可能性として、聖書では神のわざとして提示され、ロマンティズムにおける理想として反復されもした、言語と存在の一致を意味する言葉ではないかと想像することがある。たとえば『百年の孤独』においては、マコンドの創世にあたってジプシーのメルキアデスによつて羊皮紙に記された記述が、作品で記述されるマコンドの歴史と一致することになつていく。作品構成と密接に関連したこのエピソードは、キリスト教的な神話をパロディするかのよう思われるのだが、この場合にも、初めにあつたのはジュリア・クリステヴァが言うような愛ではなく、羊皮紙という保存可能な物質と特殊なかたちで結びつけられた記号であつたという意味で、シニフィアンとシニフィエが一致する場としての「愛」は不在であつたのだと言いうるのではないだろうか。また、政府

からの退役軍人年金が支給されることを確約する手紙が大佐に届かないことも、大佐の過去の忠誠にたいする政府からの愛が、大佐の愛と一致しないために愛は不在であることを意味するのと同時に、国家によってその意味と価値とを保証されるはずの手紙なるものは、結局のところ本来的にはその意味を何者にも保証されず、何とも一致しない、まさにエクリチュールであり得ないことを伝えるものではないだろうかと思えてくる。愛の不在とはしたがって、起源から切り離されたエクリチュールそのものではないのか。だとすれば、たとえば『愛その他の悪霊について』で、カトリシズムによる迫害のもとで死んだ少女をめぐって、ナサニエル・ホーソーン『緋文字』をなぞりつつ否定的に「悪霊」として提示される「愛の不在」エクリチュール」とは、起源と接続しえないがゆえに、そのものとしては否定的であつても、柳原氏の議論のコンテクストにおいては肯定的に機能しうるかも知れないのだ。柳原氏が声と手紙に言及されるとき、もしガルシア・マルケスにおける手紙のモチーフが意識されていたのだとすれば、本書で直接的に言及されることがほとんどないガルシア・マルケスや古典的ラテンアメリカ文学は、じつのところ本書に大きな影響力を持つていることになる。それに向き合ってみられてはいかがかというものは、古くさい文学研究者からの親しみに満ちた御提案のつもりである。

* * *

昨年春に知ったところでは、柳原氏は評者と同年の生まれ

で、同年代である。しかも、評者の小学校在学時以来の友人で、外語大スペイン語科に在籍したかつての英語学習の最強のライバルと同期でもあったらしいことがわかった。上記のような偶然と、こうしたわたくしごとにおける些末な細部が、文学・文化研究の実践者としての立場の起源として認識されることはあり得ないにしても、背景や環境を共有しながらも、それぞれの学びの場から、一方はメキシコへ、もう一方は反対側のアメリカ合衆国へと旅立ち、いわばあちらがわとこちらがわについて観察し続ける同僚となったことにも、意味づけされることを執拗に拒む種類の、ほんとうの意味での偶然性があるのだろう。また、評者も柳原氏同様、東京外国語大学に赴任以後、故牛島信明先生に親しくして頂いたことを光栄に思ってきた。サン・フランシスコを後にして、一昨日ロス・アンジェルス郊外にあるカリフォルニア大学リヴァーサイド校を訪れた後、昨日ニュー・ヨークに着いた。また別の偶然が、評者の記憶を過去へと引き戻すことがあった。十年以上まえ、ロス・アンジェル近郊の大学で客員研究員をさせて頂いた際に、他の些末で雑多な出来事に煩わされながら、出発前に牛島先生から頂戴した御著書をサン・ノゼ空港近くの黄色い禿げ山を見ながら読んでいたことを思い出したのだ。このことも含めて、カリフォルニアには悲しい、「愛」のない記憶が多すぎると感じなくもない。ただ、外語大の学生たちを思い出させる、日本人の大学生の一群が明るくはしゃいでいたということがあつて、喪失を繰り返しつつ旅を続けることの喜びを思い出させてくれた。その時研究員として滞在していたカリフォルニア大学アーヴァイン校では、毎週月曜日の夕方にジャック・デリダのセミナーが

開かれていた。デリダは、いつも授業のために原稿を用意したうえで、「the stranger」と「hospitality」について綿密な講義をし、講義が終わると、学内のカフェでアーヴアインの学生たちの質問に答えていた。そのデリダも鬼籍に入られたいま、牛島先生にかわつて柳原氏の教えをうけるべく本書を書評させて頂いたことにも、不思議な感覚を覚えなくもないとお断りさせて頂いてもいいかも知れない。ただ、本書を書評させて頂く機会を頂いたにもかかわらず、批評と研究がもつと長い旅路を必要とするものなのだと、牛島先生やデリダの思い出とともに確認させて頂く結果に終わりそうもあるので、今後さらにラテンアメリカや文化について教えて頂きつつ、積極的な議論を交わして頂けることを祈念することといたします。文学、文化や批評が大きな力になり得ると信じていることができた時代に育つたもの同士としての親近感と、本書のような長大な力作を上梓されただけでなく、つぎつぎと優れた御業績を発表されていらつしやることにたいする尊敬心を柳原氏に覚えながら、優れた師に恵まれた外語大の「私たち」は、経験として身につけた学問をさらに再検討し、洗練し続けなければならないのだろうと感じています。

アメリカ合衆国、ニュー・ヨークからの「手紙」として

(加藤雄二)